

愛犬との
ふれあいの俳句

秋

佐怒賀正美 選

特選

保護犬を迎へる家路よも四方色葉

近江 董花

【評】 保護犬を飼うことに決め、連れて帰ってくる家路の途中、あたりの山や里はいちめんの紅葉。犬が一日でも早く警戒を解き、懐いてくれることを祈りながら、この保護犬の命が再び輝くようにと祈っているのだろう。

秋空に働いている救助犬

竹澤 聡

【評】 能登の地震・洪水を始め各地に災害が絶えないが、そのときに活躍するのが救助犬。人間が入り込んでいけないような場所まで踏み込み、人の命を助けようとする。真青な秋空の下で救助犬は今日も働いている。

人前の苦手な犬と月を愛づ

道願 麻子

【評】 人前が苦手なのは人間だけではない。作者の愛犬も、性格はよいのだが、内気で、積極的に人前に出たりするのが苦手。でも、作者と十五夜のお月見をするのなら難しいことはない。お互い名月を愛でて静かな時間を過す。

満面の笑みして犬を見てる月

野村 信廣

【評】 ふつうは人間が月を見るのだが、視点を変えるとこんな微笑ましい句に。「満面」というからには、満月であろう。「して」は少々気になるが意味は伝わる。犬小屋にも月光が差し込む。月も犬を見守ってくれているのだ。

流星や病みたる犬のあばら骨

松村 浩子

【評】 動物を飼っていると人間同様に老病死はまぬかれない。残酷な運命だが、命の有難さや貴重さを実感するのもそのようなときである。病の老犬かもしれないが、流星と一緒に眺めて命の行方に思いを馳せているのだろう。

募集要項

■日本で唯一の「犬」をテーマにした俳壇です。愛犬とのふれあいの中で得た感慨を俳句にして応募ください。

■一般部門と児童・生徒部門（中学生以下）の2部門があります。

■原則として、五・七・五の17音でまとめてください。

■募集期間は「春（1～3月）・夏（4～6月）・秋（7～9月）・冬（10～12月）年4回の開催で、開催ごとに最終月末に締め切ります。

入選

犬連れの多き土手道秋惜しむ

石川 昇

大型犬ちいさい秋を見逃がさず

井上 秀子

野分後犬の啞えし落し物

占部 耕三

星月夜クールな似顔の迷犬札

鹿島 由美

お袋と犬の散歩や草の花

佐藤 公

佳作

コスモスの揺れる花影舞う小犬

荒木 史江

鈴虫の声に傾く犬の耳

池本 千恵

愛犬の鼻先に傷秋の山

伊藤 照子

口笛に應える犬や秋の浜

請関くにとし

秋魚欲しがる犬よ君は猫

大橋 絵代

亡き犬と拾った団栗五年置く

大原 親佳

犬の影怪獣のごと秋の暮れ

北川 順子

愛犬の足音耳に落葉あり

栗原 智美

赤蜻蛉犬は追はれて追掛けて

佐藤 節美

足早に仔犬と帰る秋の宿

佐藤 優子

入賞・発表

■開催ごとに以下の入賞句を選出します。

特選…5句

入選…10句以内

佳作…20句以内

児童・生徒の部入選…若干句

※入賞された方には、記念品（図書カード）をお送りします。入選句は会報誌「JKCガゼット」に掲載されます。

落穂田に千羽雀を追う仔犬

塩谷 順子

秋暑し保冷剤巻く犬と我

鈴木 恵美

飼い主の幸願う犬銀河ゆく

高地 雅美

家族には内緒ですよと栗ごはん

東耕 真

犬素直二百十日の空の下

中田美砂子

夜長なる読書の足に犬もたれ

須藤美知子

コスモスも犬もなくなり道侘し

高橋 健

幼犬を抱きて舐めらる今朝の秋

辻 栄春

迎へ火や犬にも霊があるならば

橋本 有子

愛犬にパワーを貰う天高し

原田祥二郎

マイナーでいいさ駄犬と焼芋を食ふ

福島 洋子

刈田跳ぶ犬足跡で点字打つ

細江 隆一

空見上げ座す柴犬や送り盆

前田 千穂

梨の味覚えた犬に亡き仔見る

山田 典子

愛犬と出遭ひしデジャヴ風の死す

吉村 元明